

「他出子」本人の意識調査からみる集落維持の可能性と課題

——浜松市天竜区佐久間町を事例として——

静岡文化芸術大学 船戸修一

1 目的

65歳以上が過半数を占める農山村集落を「限界集落」と呼び、その消滅可能性を煽るような論調が見られる。しかし、集落の年齢構成にかかわらず、集落から転出した子ども——以下「他出子」とする——が実家や集落に通うことによって、将来的な集落維持につながることを示す研究が提示されている。このような他出子に関する先行研究では、他出子の属性や居住場所、他出子が実家に通う頻度、他出子と実家・集落との関わり、他出子の帰郷意志などを明らかにし、今後の集落維持可能性を示してきた。しかし、これらの研究は、もっぱら集落に居住する親たちへの聞き取り調査から明らかにしたものである。集落の将来図を考える住民参加型のワークショップである「T型集落点検」においても、ワークショップ参加者である親たちの意見が反映される。このような調査方法では、他出子の実家や集落に対する意識や考えは、往々にして親の推測や予想である。よって、これらの意識や考えを明らかにするには「他出子」本人への調査が必要となる。

2 方法

本報告では、浜松の中山間地域である天竜区佐久間町のY集落（2019年6月現在5世帯、8人）の他出子に対する質問紙調査ならびに聞き取り調査を踏まえ、「他出子」本人の実家や集落に対する意識や考えを明らかにする。それを踏まえたうえで今後の集落維持の可能性と課題を考える。

3 結果

実家への帰郷意志を有した他出子があり、また実家への帰郷意志を示さなくても近隣に居住しつつ実家との関わりを継続しようとする他出子も少なからずいた。さらに集落に居住している親に代わり、集落の共同作業や祭礼に参加するなど、集落活動を支援する他出子もいる。一方、今は参加していないが、将来的に集落の共同作業や祭礼への支援を考えている他出子も半分以上いることが分かった。しかし、実家以外の集落住民との接点がなく、それゆえ集落活動の支援を実施することが難しいという現実も明らかになった。

4 結論

これまでの先行研究が明らかにしてきたように、Y集落では半分以上の他出子が近隣に居住し、かつ頻繁に実家に通っている。また集落活動を積極的に支援する他出子もいる。しかし、実家との関わりを維持するものの、集落への支援をためらう他出子も多数いる。よって、集落維持への積極性を醸成するためにも、他出子と集落住民との接点を増やすことが必要である。さらに、集落維持のための人的資源を「地縁・血縁」に求めるならば、他出子の子ども——集落に居住する親から見ると「孫」——の存在も無視できない。この孫たちの集落への意識や考えも明らかにしたうえで今後の集落づくりを考える必要がある。

文献

徳野貞雄・柏尾珠紀,2014,『T型集落点検とライフヒストリーでみえる家族・集落・女性の底力：限界集落論を超えて』農山漁村文化協会。